

高知県における歴史資料のデータベース化試論 —高知歴史環境GIS研究会の活動より—

楠瀬 慶太^{1*} 藤原 駿² 池内 克徳²

(受領日：2018年5月9日)

¹ 高知工科大学・客員研究員

〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

² 高知工科大学大学院 基盤工学専攻社会システム工学コース

〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: kusukei31@yahoo.co.jp

要約：本研究では、日本史学・考古学・民俗学・歴史地理学などの歴史分野のデータベースについて、全国の動向を整理し、高知県内でも歴史資料の保存継承を進めるため、研究者が連携し、全県的に歴史資料のデータベース化を進める必要性を提起した。県内では、自然災害や高齢化に伴い、歴史資料の所在把握と散逸を防ぐ取り組みが課題となっている。課題解決の方法として、県内の各分野の研究者が集まって歴史資料のデータベース化を議論している「高知歴史環境GIS研究会」の活動から、共通のデータ書式やデータ収集を模索する動きがあることも紹介した。歴史資料の保存継承には、地域資源データベースのような形で、研究利用だけでなく、住民が地域活動に利用できるデータベースの構築を進めていかなければならない。

1. はじめに

過去の人々が使用した文字資料やモノ資料から歴史を読み解く日本史学・考古学・民俗学・歴史地理学などの歴史分野において、近年基礎資料のデータベース(DB)開発が進められている。歴史学におけるDBとは、歴史資料情報(テキスト化・図面化・集成されたものを含む)を電子データで蓄積・整理し、インターネット上で検索できるシステムである。古文書や考古資料、民俗資料などの歴史資料は、調査報告書や刊本(史料翻刻集)、論文に収録され、研究者は一昔前までこれらを図書館で「紙情報」として入手し研究を行っていたが、DBの構築によってインターネットなどで、簡易に歴史資料を「電子情報」の形で入手することが可能になった。また、分野や内容の異なる複数のデータベースを共通検索するシステムの構築も進んでいる¹⁾。

歴史資料のDB化によって、地域の歴史に関する知識や情報が手軽に得られるようになることは、研

究者以外の市民にとっても有益である。これまで古文書や書籍、論文などでしか分からなかった地域の歴史情報が身近なものになれば、地域の歴史理解や歴史文化の継承にもつながるからである。

高知県では、少子高齢化に伴う過疎化が進行することで、地域の歴史文化が衰退し、歴史資料の保存や継承の問題が表面化している。また、南海トラフ地震に伴う津波・火災などによって、地域の歴史資料の保存・継承が危うくなる危険性もはらんでいる。全国では、資料保存ネットワークの設立などを通して、地域の歴史遺産として歴史資料を記録・継承する動きが広がっている²⁾。

本稿では、本県の地域課題を踏まえ、歴史資料の保存・継承を進めるため、研究者が連携し、全県的に歴史資料のDB化を進める必要性があることを提起する。すなわち、歴史資料の所在を把握してデジタル化し、DBとして行政や大学、地域が共有していかなければならない。

また、本県では、地域の歴史文化を活かした住民



図1. 高知歴史環境 GIS 研究会の様子
(高知工科大学)

による地域づくりの実践活動が行われている³⁾。この際に、地域資源として活用されているのが、研究者が明らかにした地域の歴史文化情報である。この情報をDB化して、住民らにより簡易で分かりやすく公開していくことも求められる。

歴史資料のDBは、古文書などの歴史資料だけでなく、民俗資料や考古資料、建築資料など幅広い分野の情報を網羅する必要がある。DB構築に向けた方法論について、筆者らが2016年に設立した「高知歴史環境GIS研究会」の取り組み(図1)から提起してみたいと思う。

2. 歴史分野のDB

歴史分野では、1880年代以降さまざまな歴史資料DBが作られてきた。分野ごとに公開されている主要なDBを整理し、高知県におけるDB構築の助けとしたい。

2.1 日本史学

日本史学では、明治期以降、国内の歴史資料の蒐集整理を行ってきた東京大学史料編纂所が1880年代から歴史資料DBの開発に取り組み、研究機関や大学にDB化の流れが広がっている。1980~90年代に全国で相次いで公文書館が整備され、「デジタル・アーカイブズ」の考え方が普及したこともDB化を加速化させた⁴⁾。以下ホームページ上で公開されている主要なDBを整理し、その性格を記す。

国立の研究機関では、【アジア歴史資料センター】(<https://www.jacar.go.jp/>)の近現代資料のDBが広く利用されている。サイトは、国立公文書館が運営し、明治期から第二次大戦期の日本とアジア近隣諸国等の歴史に関する公文書類や書籍の画像データ(PDF・JPEG)とテキストデータ(一部)が

閲覧・ダウンロードできる。文書類は種別、年代などで階層化されて分類されている。国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵のデジタル化された膨大な資料を閲覧でき、文書の五十音検索やキーワード検索、地名・人名・出来事などのトピックでも検索ができる。非常に完成度の高いDBであり、一般の人も検索しやすいシステムを構築し、近現代史研究には欠かせない歴史資料DBとなっている。例えば「高知」で検索すると、防衛研究所の資料などを中心に5604件の文書がヒットする。また、地域研究機関である「岡山県立記録資料館」の公文書・古文書データベースとも検索システムが連動している点も特徴である。

語句検索で重宝するのが、明治政府によって刊行された百科事典「古事類苑」(大正版洋装本)を収録した【国文学研究資料館】の「古事類苑データベース」(<http://base1.nijl.ac.jp/~kojiru/en/index.html>)で、ホームページから全文をテキストデータで閲覧・検索でき、画像データ(PDF)で見られる。【国文学研究資料館】は、他にも『歴史資料』分野で「日本実業史博物館コレクション」「伊豆菰山江川家文書」「史料所在情報」、『近代文献』分野で「近代書誌・近代画像」「明治期出版広告」、【研究情報】分野で、「歴史人物画像」「連歌・演能・雅楽」「館蔵社寺明細帳」「江戸時代歴史資料」など多彩なDBを公開している。

【国立歴史民俗博物館】が、所蔵資料や図書、研究成果をまとめた「データベースれきはく」(<https://www.rekihaku.ac.jp/doc/t-db-index.html>)も歴史、考古、民俗などの資料を網羅した総合的なDBとして注目される。DBはそれぞれ年代や種別などで検索でき、テキストや画像情報が閲覧できる。「旧高田領取調帳」「荘園関係文献目録」「中世地方都市」「江戸商人・職人」などのDBに全国的な資料収集の成果が収録されている。

国内最大の歴史資料収集機関である【東京大学史料編纂所】(<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>)のDBも日本史研究に欠かせないものになっている。平安時代から室町時代の公家日記、戦国時代の武家日記を収録した「古記録フルテキスト」、『大日本古文書』などを収録した「古文書フルテキスト」は用語検索で文書の該当箇所のテキストが表示される非常に便利なDBである。ほかにも「中世記録人名索引」「花押カード」などの人物検索DB、「歴史絵引」「肖像情報」「荘園絵図摸本」などの画像DB、欧文日本古代史料解題辞典「電子くずし字字典」など研究支援DBも充実している。

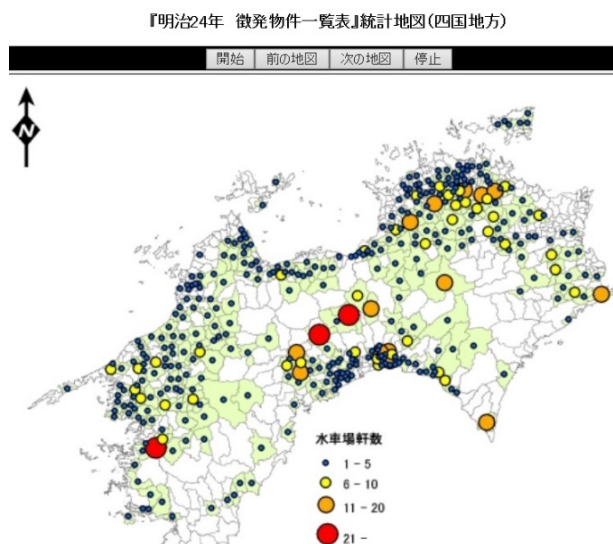


図2. 明治期四国の水車棟数
(筑波大「地域歴史統計データ」より引用)

歴史資料から得られた人口や農産物収穫量などの数値情報をまとめたDBでは、【筑波大学村山祐司研究室】が公開している「地域歴史統計データ」(<http://giswin.geo.tsukuba.ac.jp/teacher/murayama/datalist.htm>)が、地理情報システム(GIS)を導入したDBとして注目だ。ユーザー登録をすれば、明治・大正・昭和期の市町村の「行政界データ」や「人口データ」「国勢調査データ」などがダウンロードできる。GISで、地図上に市町村別の人口や人口密度、倉庫棟数、水車数、牛馬数などを表示した「統計地図」もあり、地域比較の基礎資料として活用できる(図2)。

ほとんどの日本史学のDBは、まず古文書などの歴史資料の調査を行ってその概要をまとめた【目録データ】を作り、次に【画像データ】、そして【テキストデータ】を作成し、語句検索ができるシステムを構築している。【目録データ】はExcelファイル、【画像データ】はJPEGやPDFファイル、【テキストデータ】はWordなどのテキストファイルで作成されている。数値情報は、公文書や地誌などに記されたデータを抽出してCSV(エクセル)ファイルに打ち込む形でDB化し、図表化してGISで表示・分析する方法が採用されている。

2.2 考古学

考古学の分野では、全国の埋蔵文化財センターが遺跡の発掘調査を行った膨大なデータを調査報告書という形で刊行してきた。かつては紙ベースの報告書の形でしか閲覧できなかった考古情報は、現在【奈良文化財研究所】のホームページ「全国遺跡報告

総覧」(<http://sitereports.nabunken.go.jp/ja>)から遺跡名を検索すると、その調査報告書がPDFファイルで見ることができる。さらに、各遺跡の出土遺構や遺物のデータもDB化されており、「石鍋」「土師器」などのキーワードを報告書のテキスト内から検索する機能も構築されている。

【奈良文化財研究所】では、「木簡」「墨書土器画像」「和同開珎出土遺跡」「古代遺跡寺院」など報告書の考古情報を検索できるDBも公開している(<https://www.nabunken.go.jp/research/database.html>)。

また、岡山県では、県が防災や農村、文化財などの情報を盛り込んだ「岡山全県統合型GIS」(<http://www.gis.pref.okayama.jp/pref-okayama/Portal>)というシステムを公開し、指定文化財の位置とともに遺跡範囲地図がGISの地図上で検索でき、遺跡の時代の出土遺物、遺物の保管場所などが見られるようになっている。

ほとんどの考古学のDBは、調査報告書や遺跡地図をベースに構築されており、研究に欠かせない集成作業の手間が大幅に簡略化されている。GISの導入は、【国際日本文化研究センター】が構築していた平安京・京都遺跡、地震痕跡遺跡、佐賀弥生遺跡などがGISで検索できる「GIS考古学データベース」のシステムが2013年に休止するなど、十分に進んでいないようである。

2.3 民俗学

民俗学の分野では、民俗学者らが集めた祭礼や伝承に関する膨大な民俗誌が、地域雑誌や報告書などにまとめられているが、日本史学や考古学に比べてDB化が進んでいない。国立歴史民俗博物館の「データベースれきはく」で、「民俗語彙」「俗信(動植物編、身体・病編)」などのDBから、民俗誌が書かれた雑誌などが検索できるが、その詳細は公開されていないため、文献に当たるしかない。

一方、全国の怪異・妖怪伝承をまとめた【国際日本文化研究センター】の「怪異・妖怪伝承データベース」(<http://www.nichibun.ac.jp/yokaidb/index.html>)は、優れたDBで、妖怪の名前や地名から伝承が紹介された雑誌等が検索でき、その要約が記載されている。

祭礼に関しては、【文化庁】の「国指定文化財データベース」(https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys_mb/)で祭礼(信仰)を選択すると、68件の指定文化財の詳細や写真が閲覧できる。民具などの民俗資料に関しては、地域の博物館がDB化に取り

組んでおり、埼玉県内の4カ所の県立博物館の「収蔵資料データベース」(<http://rekimin-database.jp/search/index.php>)や【滋賀県立琵琶湖博物館】の収蔵民具と古写真を検索できる「民具」「画像」のDB(http://jmapps.ne.jp/biwahaku_h/index.html)では、地域に残された民具の写真や特徴、昔の風俗写真を見ることができる。

民俗学のDB化は、雑誌などからの民俗誌の抽出、民具や写真資料の整理記録などが重要な作業となっている。民俗学の研究者が減っていることもあり、全体にDB化が進んでおらず、研究利用できる網羅的なものが少ない。

2.4 地理学

地理学の分野では、歴史情報を地図上で可視化して見せるツールとしてGISが取り入れられた。1990年代後半以降、歴史地理学⁵⁾や考古地理学⁶⁾の分野で導入が進み、DB化された地図や遺跡などの歴史情報を地図上で記し、検索・解析するシステムを構築する動きもあるが、GISを活用する研究者は少なく、大きく普及しているとは言えない。

地図や絵図のDBでは、【国立国会図書館】の「デジタルコレクション」(<http://dl.ndl.go.jp/>)で複数の絵図が公開されているほか、【国際日本文化研究センター】の「所蔵地図データベース」で979件の地図が公開されている。いずれも画像データで地図が閲覧できる

GISを活用した【奈良女子大学古代学学術センター】の「奈良盆地歴史地理データベース」(<http://nara-hgis.jp/>)は完成度の高いDBである。「小字」、「前方後円墳」、「万葉歌碑」、「延喜式内社」などのDBがあり、中でも「小字データベース」は地図上で奈良盆地の大字・小字が条里遺構と対応して検索できるシステムとなっている。

地名DBでは、『倭名類聚抄』所収の古代地名(国郡郷名)を収録し、木簡の記載地名などと連動させて検索ができる【奈良文化財研究所】の「古代地名システム」(<http://chimei.nabunken.go.jp/>)や、【HGIS研究会】が『大日本地名辞書』『旧5万分の1地形図』などのデータをまとめた「歴史地名データ」(http://www.nihu.jp/ja/publication/source_map)などが公開されている。地理学のDBでは、出力形式としてGISを使用する場合が多く、地名や絵図などの情報は、CSV(エクセル)ファイルで作成され、DB化されている。文献からの広範な歴史情報の抽出が多く、大味な印象を受ける。

2.5 文化財全般

歴史、芸術、建造物を含めた文化財全般のDBとしては、国宝、重要文化財など国指定文化財等を網羅的に紹介する「文化遺産データベース」(<http://bunka.nii.ac.jp/db/>)が上げられる。所蔵館やキーワードの検索ができ、博物館や文化庁のDBともリンクし、歴史資料の写真や詳細が検索できる。さらに、国立公文書館や国文学研究資料館、国立歴史民俗博物館などの大学共同利用機関法人【人間文化研究機構】の所属機関の歴史資料DBを横断検索できるシステム【nihuINT】(<https://int.nihu.jp/>)も構築されている。

これまで見てきたように、歴史資料DBの開発は、科学研究費を用いた共同研究で進められるため、大学や研究機関の研究者らを対象とした専門性の高い内容となっている。膨大な資料を網羅したDBの構築には、多大な時間と人件費が掛かるほか、資料批判を含めたデータの信頼性の問題から校閲の必要性も指摘されてきたが⁷⁾、有用性の高いDBの公開はかなり進展し、研究利用も進んでいると言える。一方、これら研究機関のDBでは、取り扱う歴史資料は全国規模で使われるものが多く、地域的な資料の収録は少ないという特徴がある。

県単位でのデータベースは少ないが、GISを用いて文化財や農業、土木、地理などの情報を盛り込んだ岡山県の「岡山全県統合型GIS」が検索型DBとしては参考になる。文化財に関する簡易情報のみで詳細な情報は掲載されていないため、より詳細なDBと連動したものに発展させられれば、地域の歴史情報を詳しく知るツールになるだろう。

また、県内の多様な地域文化の継承と活用、そして未来へ向けた新たな地域文化の創造に資することを目的として新潟県が開設したホームページ「新新潟文化物語」(<https://n-story.jp/>)の「地域文化データベース」も参考になる。「自然・環境」「史跡・建造物」「産業」「生活文化」「食」「地域活動」「新潟の有名人」などの項目で、新潟県内の文化が地図・写真とともに紹介されているサイトで、地域のイベントなどと同時に検索することができる。地域の文化財や文化、自然などをうまく融合し、検索できるDBで、一般にも分かりやすく仕上がっている。

専門性の高い研究利用型DBと、一般の人でも分かりやすい地図や地名検索機能が付いた地域利用型DBを同時に作るのは難しく、地域型から研究型へリンクするような形が望ましいと考えられる。また、GISによる地図検索型が必ずしも分かりやすい

とは言えない。

3. 高知歴史環境 GIS 研究会の活動

全国的な歴史資料の DB 化の流れを受けて、高知県でも DB 化の議論を始めようと 2016 年 12 月に「高知歴史環境 GIS 研究会」が結成された。きっかけは、四万十町の歴史民俗を調査している住民団体「奥四万十山の暮らし調査団」（武内文治代表）の発案である。

歴史学や考古学、民俗学など本県の歴史情報は、各分野で調査研究が進められ、報告書や研究書の形で活字化されているが、専門性が高く、分野外の研究者や一般の方には、利用しづらい情報になっているという現状があった。そこで、県内の遺跡や城郭、古文書、民俗、地名などの歴史情報を蓄積する DB を構築し、GIS を使って地図上に表示して情報を理解・利用しやすくする取り組みを進めようと、各分野の研究者に呼び掛けて結成されたのが、GIS 研究会である。

高知大学や県立埋蔵文化財センター、県立歴史民俗資料館の研究者や、在野の研究者らが参加し、歴史資料の DB 化について議論。技術面で高知工科大学の高木方隆研究室に協力いただき、フリーソフト「QGIS」を歴史情報の記録調査にどのように活用できるかを学んでいる（図3）。以下、過去5回の研究会で行われた議論や調査をもとに、本県における歴史資料の DB 化の方向性を提示する。

3.1 DB 化はなぜ必要か？

自然災害や過疎化などに伴う地域資料の散逸を危惧し、県内 61 の博物館や図書館、団体でつくる「こうちミュージアムネットワーク」が、2014 年に高知市で「公文書保存・利用研究会」「地域文化資源ネットワーク」などと連携して高知県内の資料保存に関するシンポジウムを開き、今後の資料保存と継承に向け問題を提起した⁸⁾。ミュージアムネットでは専門部会をつくり、資料保存の可能性を探ったが、シンポ以後の活動は大きく進展していない。また、土佐山内家宝物資料館（現県立高知城歴史博物館）が、2012 年から高知県内の集落で古文書や史跡の調査を行い、「地域記録集」として報告書を発行するなど地域資料調査を続けているが、収蔵資料や調査情報を DB 化し、公開する取り組みは十分に進んでいないのが現状である。

前章で見てきたように、さまざま歴史情報が DB によって共有され、皆がインターネットで閲覧できるシステムが構築されている全国的な流れからす



図3. GIS 研究会の実習風景
（香美市土佐山田町本村）



図4. 「Web こうち」の文化財地図

れば、本県においても資料公開に向けた DB 構築の議論を始めないといけない段階に来ていると言える。また、南海トラフ地震による大規模被害が予想されており、地域の歴史資料の保存・継承に向け、どこにどのような資料がどのような状態で保管されているのかを把握し、記録する DB 化の作業も急がなければならない。

GIS 研究会では、本県における歴史資料 DB 構築の目的について主に以下3つの意見が出された。

- ① 歴史資料の把握と保存
- ② 歴史情報の可視化・汎用性の確保
- ③ 情報のオープンデータ化促進

「歴史資料の把握と保存」については、個人や博物館などが個別的に資料調査等を行っている。この体制では、互いの情報を集約しても、データの過不足が発生してしまい、DB の基礎データを作る際に再調査の手間が発生する。共通 DB 化に向けては、研究者が連携して共通の調査方法や整理書式、保存方法を作ってマニュアル化し、DB の基礎データを作っていかなければならない。今後、各分野で共通書式について話し合いを進めていく必要がある。

「歴史情報の可視化・汎用性の確保」については、DB の公開方法、DB を保守管理する主体について

議論した。歴史資料によっては、個人情報などが特定されるケースや資料保管者が公開を望まないケースもある。公開の範囲については、研究者のみが共有できるDBと一般に公開されるDBを分けるべきという意見が出た。

DBの公開方法については、GISを活用し、可視化して表示する方向性で議論された。研究会では、県内の歴史民俗を写真や映像で記録している団体「地域文化デジタルアーカイブ倶楽部」（大野加恵代表）がホームページで公開している「Web こうち—ぶらり Map」（<http://www.webkochi.net/map/>）が紹介された（図4）。GISを使った地図上に、県内の民俗や文化財の情報（データはCSV形式で作成）を表示して検索できるシステムで、新潟県が開設した「新新潟文化物語」に近い。収録されている文化財情報が少ないが、今後各分野の情報を集約していけば、DBの公開ツールの候補になるだろう。

また、高知工科大学が構築している県内の植物データなどの情報を集約してDB化し、GISで地図上に表示していく「フィールドデータベース」（<http://ec2-13-231-22-102.ap-northeast-1.compute.amazonaws.com/>）も候補になる⁹⁾。歴史文化に関する情報と理工系の情報が同時検索できるデータベースは少なく、希少である。研究者にとっては分野横断や総合研究の可能性につながり、一般住民にとってもさまざまな地域情報が検索できるツールとして汎用性が高い。過去に作られたDBには、保守管理がなされず消滅したものも多い。管理体制については、個人や団体、大学研究室でなく、「継続性が見込まれる大学全体としての管理が必要」との意見が出された。

「情報のオープンデータ化促進」については、DBの基礎情報となる県や市町村が保有する歴史文化に関連するデータ（農業、土木、水利、土地管理等）の公開を求める声が多く出された。個人情報保護などの観点から行政の持つデータは非公開または限定公開のものが多く、DBの基礎情報の取得およびデータ作成に、多大な経費や時間を要している。そのため、GIS研究会などの研究機関が、県内の小地域（モデル地区）で行政が持つ基礎データや文化財情報をもとに、地域の歴史情報を可視的に表現した成果を示すことで、「公開の有用性をアピールし、行政のオープンデータ化を促進してほしい」との声が出された。

DB構築の目的を踏まえ、GIS研究会では、まずGISの知識が少ない歴史分野の研究者が「QGIS」の使い方を学びながら、DB化の議論を進めていく実

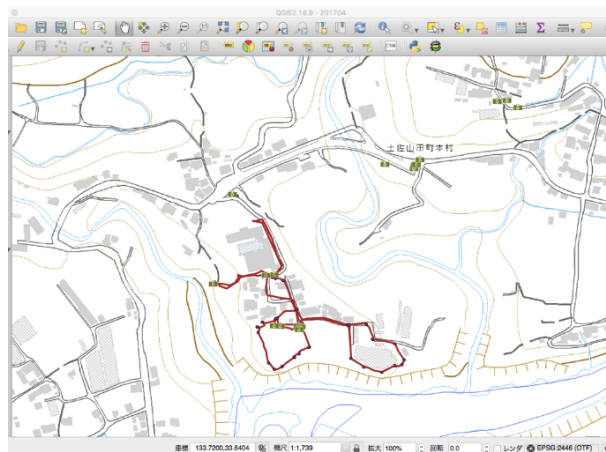


図5. 踏査に基づく佐岡城跡の範囲

習を香美市佐岡地区で進めていくこととなった。佐岡地区は、古文書等の歴史文献や考古資料が豊富で、高知工科大が「里山基盤科学技術の社会実装モデルプロジェクト（通称：佐岡プロジェクト）」で調査に入り住民と人間関係が良好なことなどから、実習のモデル地区として選んだ。

3.2 DB化への模索

GIS研究会では、香美市佐岡地区で2017年に計3回、GISを使って地域の歴史を調査する実習を行った。実習には、高知工科大の建築、土木分野の研究者・大学生のほか、県内の考古、民俗、地理、歴史分野の研究者も集まった。実習は、地域をGPS（全地球無線測位システム）やGISを使って調査して地域の歴史情報を収集し、可視化する方法論を学ぶ場となっている。

実習では、佐岡地区の本村集落を主に踏査。まず、現在山林や畑地となっている戦国期の佐岡城跡を県埋蔵文化財センターの職員とGPSで座標を取りながら歩いた。城の範囲の確定や土塁の残存状況の確認も行われ、石造物の専門家とともに中近世の五輪塔の残存状況も調査した。踏査結果を持ち帰り、GISで踏査経路を地図上に表示し、佐岡城跡の範囲などを確認した（図5）。高知県の遺跡地図は、地図上に調査者が任意で遺跡範囲を描く形で作成されており、遺跡範囲は座標データなどで確定されたものでないため、正確性を欠いている。今後、上記の方法を応用して遺跡範囲を確定し、DB化する作業は有益な方法である。県内には、城跡を踏査する研究者も多い。彼らがGPSを持って同様の手法で調査し、GISによる地図化ができれば、城郭研究の重要な資料となる。地域住民にとっても、身近な城跡の状況が可視化して把握でき、地域の歴史文化を

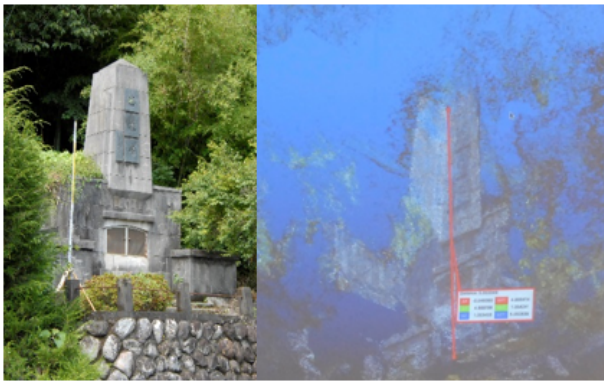


図 6. 佐岡地区忠霊塔の 3D 化

知るツールとなり得る。遺跡の DB 化の方法論の一つとして提案したい。

続いて、「フォトスキャン」と呼ばれるソフトを使って石造物を 3D 化する方法を学んだ。佐岡地区にある忠霊塔（戦没者慰霊碑）は、巨大な石造物で実測が困難な資料である。そこで、塔の周囲を数百枚の写真で撮影し、写真データから 3D 化をして石造物を記録する調査方法を試験した。要した時間は、写真撮影に約 10 分、ソフトにデータを取り込んで画像処理を行うのに約 30 分である。測量用スタッフを塔横に置くことで、高さや幅なども計測できた（図 6）。石造物は風雨による摩滅が激しく、実測も難しいため、正確な記録が行われていないものが多い。今後、石造物の DB 化に向けた調査方法の一つとして有益なものになる可能性が示せた。

また、近世初期の太閤検地の土地台帳『長宗我部地検帳』を使った現地踏査も行われ、成果の一部を論文にまとめた¹⁰⁾。GIS 研究会では、今後も実習を通して、GIS の歴史分野への活用の可能性を探り、DB 化に向けた議論を進めていく予定である。

4. 高知県歴史資料 DB 試論

本章では、高知歴史環境 GIS 研究会での議論を踏まえ、高知県における歴史資料 DB の基礎データの作成方法について提起してみたい。基礎データの作成方法としては、以下のような手順が想定される。

- (1) 文献に記された歴史情報の DB 化
 - (2) ネット等で公開された歴史情報の DB 化
 - (3) 調査・踏査などで収集した歴史情報の DB 化
- (1) は史料・雑誌・論文・報告書などの文献から歴史情報を抽出し、データ入力する手法である。(2) はネット上の DB（オープンデータ）などから本県の歴史情報を抽出する方法で、テキストや画像などのデータが取り出せるため比較的容易にできる。(3) は城跡や石造物の調査などで収集した情報を

データ化していく作業。調査に時間が割かれ、データ化が遅れる傾向がある。いずれも、各分野で共通のデータ書式を確立する必要があり、GIS で地図化するためには、歴史資料が所在する場所の座標データが必要である。

以下、日本史学の文書資料、民俗学の民具資料、地理学の地名資料の 3 分野の基礎資料のデータ化について、県内資料を例にモデルを示したい。

4.1 文書資料のデータ化

戦災による被害を受けた本県では、中近世の古文書や古記録類が焼失して非常に少ない。これらは県立図書館や県立の博物館施設に収蔵され、『高知県史』や『歴代公紀』などの編纂物によって概要が把握されているが、テキストデータなどは公開されていないため、(1) の手法でデータ化を進める必要がある。県立図書館では、絵図や伝記、古文書などを収蔵資料（一部）の画像データを「デジタル化資料公開ページ」（<http://kochilib.iri-project.org/>）で公開している。収蔵資料の管理・データ化は、管理団体の業務であるため、その方法論等についても GIS 研究会と博物館・図書館とで連携をしていきたい。

一方、近現代資料については、県内の家庭に残されたものが多く、その詳細は十分に把握されていない。比較的時代の近い資料であることから、代替わりなどで資料が廃棄・散逸してしまう危険性が指摘されている¹¹⁾。筆者が関わっている文化財関係者や教員 OB でつくる団体「高知戦争資料保存ネットワーク」では、毎月 1 回県内の家庭に残る近現代資料の目録作成・写真撮影を行い、資料をデータで残す活動を続けている。調査されるのは未報告の資料がほとんどで (3) の手法でデータ化を進めている。

以下、文書資料のデータ化のモデルとして、保存ネットの DB を紹介する。保存ネットでは、文書資料を調査する際、資料に関する情報を記録した「資料目録」を作成する。過去には「目録カード」という形で「紙情報」で記録されていたものだが、保存ネットでは調査をする各人が作業をパソコンで行い、Excel に入力する形で行っている。目録の書式は、DB 化を見据えて汎用性の高いものにするため、東京大学文書館の書式を参考に簡易版、概要、詳細版の 3 つの書式を使用している。

簡易版は、資料名や点数、年代、保管先など最低限の情報を記したもの。概要版は、資料作成者の戦歴（来歴）や資料の概要、保存状態などを記したもの（図 7）。詳細版は、1 点 1 点の資料の情報を細かに記

資料番号	タイトル					高知戦争資料保存ネットワーク(09052728852)
KK1	山崎久資料				調査者 楠瀬慶太	作成年月日 2016年7月6日
年代域	昭和14年～昭和20年				資料群の作成年月日	不明
作成者名称	山崎久(1918年6月14日～2011年4月27日)	サイズ				
資料保管先 保存ネットワーク事務局・楠瀬(2016年6月29日に長女倉谷久子氏から一部寄贈)、思い出綴・繁藤災害アルバムは返還						
記録資料伝来		山崎久氏は復員後、高知県警に復帰。県内を転々とするが、定年後に建てた高知市朝倉丙の家に従軍時の資料を保管していた。山崎久氏、妻の敦子氏が死去後、横浜市在住の長女倉谷久子氏が高知市の実家を整理する過程で、おたき上げを検討していたが、保存ネットワークが重要資料として一部を寄贈いただいた。調査後に資料の写真・目録のDVDは倉谷氏にも渡し保管してもらった				
作成者経歴(長女倉田久子から聞き取り)						
山崎久は大正7年6月14日、須崎市浦ノ内鳴無の農家、山崎左吉の次男(4人きょうだい。長女、次女は若くして病気で亡くなる)として生まれた。18歳ぐらいで警察に入ったがすぐに徴兵された。昭和14年5月3日に高知市朝倉の44連隊に留守隊に応召。昭和15年5月30日に宇品港を出港し、6月8日に蕪湖到着し、支那事変に従軍(上海周辺)。輸送船警備を経て水上勤務第104中隊、昭和16年8月5日から騎兵第55連隊に転属、8月12日には南京を出発して19日に大阪上陸。20日に召集解除され帰高して妻敦子氏(1924年7月7日～2014年12月10日)と結婚。昭和19年5月1日に長女・久子が生まれる。昭和20年1月に44連隊に再入隊(広島にも行っている、敦子は生まれたばかりの長女を連れて兵営に会いにいった)。その後、昭和20年1月9日に歩兵第44連隊補充隊に応召。1月21日に博多を出て釜山を経て2月8日に福建省閩安鎮に上陸して警備勤務。独立625大隊第二中隊で集号作戦に参加。7月17日～8月13日に松江付近で陣地構築・警備。終戦後は寧波、上海などを經由して1946年1月に復員。終戦後は高知県警に復帰し、警備畑を歩む。1974年の繁藤災害では捜索隊の隊長を務める。警備部長(警視正)で退職。						
範囲・内容	山崎久が持ち帰った支那事変の写真、賞勲局からの賞状・陸軍記章、戦時期に家族から送られた手紙(軍事郵便)集、繁藤災害の写真など56点					
資料の保管状況	山崎家で箱などに入れて保管していた。紙やけはあるが、虫食いはなし。資料の保存状態は良い					
法的位置づけ	保存ネットワーク(楠瀬)に寄贈					
次代の保管者・保管先	保存ネットワーク(楠瀬)に寄贈					
利用条件	公開可					
データ	○ 倉谷久子氏からの聞き取り音声データもあり					
出版情報	一部出版物あり(詳細版参照)					
関連文献	『高知で編成された郷土部隊《案》』『高知で編成された郷土部隊小史』(いずれも自費出版)					

図 7. 保存ネット目録の概要版

資料群名	山崎久資料			資料番号	KK1(1～17、S1～15)					
詳細番号	シリーズ名	作成者	年月日	数量	記述レベル	内容	公開可否	写真	現物	写真番号
KK1-1	「会員名簿」	34山中会	平成16年1月	1	名簿	冊子。44連隊山中隊の生存者会の名簿。写真はPDFデータ。※個人情報あり	△	○	○	KK1-S1
KK1-2	「高知で編成された郷土部隊《案》」	34山中会	平成5年7月	1	隊誌	出版物。高知で編成された部隊の概要や足取りをまとめたもの。『高知新聞』1993年8月14日朝刊15面「やいづ鳥」に紹介記事あり。記事の紙刷りを書籍の最後に付けた。	○	×	○	-
KK1-3	「高知で編成された郷土部隊小史」	34山中会	平成6年8月	1	隊誌	「高知で編成された郷土部隊《案》」の改訂版。地図や資料などはなくなりコンパクトに。	○	×	○	-
KK1-4	「支那事変従軍記章之證」	賞勲局	昭和15年4月29日	1	記章証明書	「賞勲局」が「陸軍歩兵上等兵 山崎久」に発行した支那事変従軍記章の証明書。「賞勲局総裁 下條康麿」、「賞勲局書記官 村田八千穂」の署名・印あり	○	○	○	KK1-S2
KK1-5	「支那事変従軍記章」(モノ資料)	賞勲局	昭和15年4月29日	1	従軍記章	支那事変の従軍記章。木製の箱にメダルが入っている。	○	○	○	KK1-S3-1～5
KK1-6	「恩賞」	賞勲局	昭和15年4月29日	1	恩賞	「賞勲局」が「陸軍歩兵上等兵 山崎久」に金七〇を支那事変の功績により下賜した証書	○	○	○	KK1-S4
KK1-7	「賞詞」	小笠原敬之	昭和16年2月1日	1	賞状	「水上勤務第百四中隊長陸軍中尉従七位 小笠原敬之」が「陸軍兵長山崎久」に「一等兵ノ模範タリ」として贈られた賞状。	○	○	○	KK1-S5
KK1-8	「陸軍下士官適任證書」	川嶋吉蔵	昭和16年8月26日	1	証明書	「西部第三十五部隊長陸軍中佐従五位勲三等川嶋吉蔵」が「陸軍兵長山崎久」を「兵科下士官適任ノ者ト認定ス」とした証明書	○	○	○	KK1-S6
KK1-9	「教育勅語」		明治23年10月30日	1	教育勅語	「教育ニ関スル勅語」は、明治天皇が山縣有朋内閣総理大臣と芳川顕正文部大臣に対し、教育に関して与えた勅語。以後の大日本帝国において、政府の教育方針を示す文書となった。一般的に教育勅語という。1890年(明治23年)10月30日に発布。当文書は、山崎久が親戚の教員から戦後もつたという教育勅語(倉谷久子氏談)。	○	○	○	KK1-S7

図 8. 保存ネット目録の詳細版(一部)

施設名称	所在地	開館時間	休館日	管理者	電話番号	備考	点数	台帳	公開
東洋町ふれあい館なごみ	安芸郡東洋町 河内 350	-	-	東洋町教育委員会	0887-29-3037	30年前から甲浦、野根地区のグループが江戸時代末期～昭和までの民具 農具や漁具などを収集保管。2000年代に室戸高校甲浦分校（廃校）を利用した。なごみに集約した。公開はしていない。	1000点以上	○（作成中）	×
鯨館 鯨資料館	室戸市吉良川町丙 890-11	午前 9時～午後 5時	月曜	室戸市教育委員会	0887-22-5142	1996年8月に道の駅キラメッセ室戸内に開館。捕鯨関係資料を展示する。	約 300点	○	○
室戸市立図書館	室戸市室津 2404-5	-	-	室戸市教育委員会	0887-22-5142	資料館に展示していない道具や文書、絵図など鯨関係資料を保管している。	数十点	○	×
室戸市立吉良川公民館	室戸市吉良川町甲 2396	-	-	室戸市立吉良川公民館	0887-25-2002	公民館の2階および倉庫に保管。脱穀機や鎌、火鉢、石臼など。	不明	×	×
室戸小学校郷土資料室	室戸市浮津 115	-	要予約 閲覧依頼	室戸小学校	0887-22-0888	3階の空き教室に農具や和船、生活用品、捕鯨用の漁具を保管している。数十年前に保護者から寄託された資料。最近、耐震工事をして置ききれない資料は旧水産高校校舎に	不明	×	○
旧室戸水産高等学校	室戸市室戸岬町	-	-	室戸小学校	0887-22-0888	室戸小学校の耐震工事のため、郷土資料室の置ききれなくなった民具を保管している。	不明	×	×
奈半利小学校	安芸郡奈半利町乙 1648-2	-	要予約 閲覧依頼	奈半利小学校	0887-38-8188	2階の空き教室に保管展示。農具が中心でガラスケースに入った学校の教科書、文庫などとともに展示している。	約30点	×	○
浦の会管理の古民家	安芸郡奈半利町西町	-	-	浦の会	0887-38-4804	地元有志による町おこしグループ「浦の会」が、収集した民具を古民家を借りて保管している。一部は押し入れなどにいれてある。唐箕などの農具、火鉢、おひつ、茶碗などの生活	約50点	×	×
岡御殿	安芸郡田野町 2147-1	午前 9時～午後 4時半	火曜日	田野町教育委員会	0887-38-2511	天保十五年（1844年）に建築され藩主が参勤交代や東部巡視の時に本陣として使用された県指定文化財。蔵の2階に桶や食器、茶弁当、臼、将棋、長持など岡家で使用された民具を中心に展示。	不明	×	○
田野町教委倉庫	安芸郡田野町新町	-	要予約 閲覧依頼	田野町教育委員会	0887-38-2511	事務所跡の一室を倉庫として使用。農具や生活用品などの民具、歴史資料もある。資料は教委に連絡すれば見ること	約100点	○	○
旧中山小中学校	安芸郡安田町大字正弘 153	-	-	安田町教育委員会	0887-38-5711	農具などの保管場所があったが、現在は集落活動センターに転用するため空き部屋に保管している。	不明	×	×
北川村温泉	安芸郡北川村小島 121	なし	なし	北川村温泉	0887-37-2321	唐箕やひきくわ、電話、養蚕の道具などを温泉の入り口に展示している。	約10点	×	○
馬路村郷土館	安芸郡馬路村大字馬路 356	-	要予約 閲覧依頼	馬路村教育委員会	0887-44-2216	馬路温泉敷地内にある独立した建物に林業や生活用具、古文書などを収蔵展示。	2896点	○	○
安芸市立歴史民俗資料館	安芸市土居 953-イ	午前 9時～午後 5時	月曜日	安芸市立歴史民俗資料館	0887-34-3706	安芸市内で使われた農具や生活用品などを展示保管。ほとんどは収蔵庫に保管し、一部を展示している。昭和30年代の茶の間の様子を再現した展示を行っている。	845点	○	○

図 9. 民具収蔵施設の簡易版データベース（一部）

したもの（図 8）と、段階をおって詳しく資料の情報が記録できる形にしている。資料の重要度や整理時間に応じて、3 書式を使い分けて目録を作成できる。簡易版は短時間で作成できるが、概要版・詳細版の作成には聞き取りや資料の読み込みが必要となる。目録書式は保存ネットのホームページ（<https://www.facebook.com/groups/404644176658001/>）からダウンロードできる。

現状、さまざま近代資料の目録を作成しているが、不自由なく使えており、汎用性も高く文字資料のデータ化の共通書式として提案したい。ただし、文書資料の場合、保管場所が博物館でなく個人宅であることから、位置データを記す場合は個人情報への配慮など注意が必要である。資料作成者の出身地（村単位）を位置データで記し、地図上で検索すれば、資料群名と簡易版目録に記載された情報が出てくる形で GIS 上に落とし込める可能性がある。また、保存ネットでは、調査資料のデータ（目録ファイル＋画像データ）を DVD に焼いて高知県立図書館に収蔵予定で、図書館で現データに当たることができる。なお資料 DB のネット上での公開については、データ整理に膨大な時間を要することが予測されるため未知数である。

4.2 民具資料のデータ化

農具、漁具、山道具など本県には多くの民具資料が残され、県内のさまざま場所に収蔵されている。最も分量が多くかつ整理されたものは、県立歴史民俗資料館分館の大柘中学校体育館にある資料だが、

他は地域の公民館や教育委員会倉庫などに保管されている。ここでは、筆者が 2014 年に日本民具学会の依頼を受けて調査した民具所蔵施設 78 施設の DB を紹介する。図 9 はその簡易版（一部）で、詳細版も作成しているが、日本民具学会で配布された紙の資料のみで、データとしては公開していない。DB では、「施設名称」「住所」「連絡先」「開館状況」「資料点数」「資料の種類」「設置経緯」「台帳の有無」など 14 項目について施設に聞き取り調査した結果を記している。民具資料を調査研究する際の基礎資料となる DB である。

DB をもとに高知県立大学の教員 OB（井本正人・川口順子氏）が、このうち 66 の収蔵施設を訪ねて詳細調査を行い、施設内や民具資料の写真と動画を撮影している。この成果は、井本氏らがまとめたホームページ「Real Kochi（リアル高知）」（<http://www.realkochi.org/p/lifestyle/p/culture/p/ningu/index.html>）に収録された。ホームページは市町村別に施設をまとめ、一般の方が民具収蔵施設の詳細を調べられる（図 10）。「Real Kochi」は GIS 連動型でないが、今後、施設の位置データを入力し、GIS の地図上で施設情報の表示することが可能である。そこに施設の簡易情報、リンクに「Real Kochi」のアドレスを付記すればより詳しい民具情報が得られるシステムが構築できるのではないだろうか。

同様に、祭礼や神社についても情報を収集して、位置データを付与していくことで、地域の細かな民俗情報を網羅した DB をつくることのできる。地域

【芸西村】

●芸西村文化資料館：

資料の整理	整理して一部展示。生活用具、農・施設園芸用具、漁具、写真帳
保存方法	—
公開・活用	公開（有料）



図 10. 「Real Kochi」の民具施設データベース

No	ちめい	地名	地区名	地検帳』比定ホノギ	X軸 北緯)	Y軸 東経)
1	いちいだに	一井谷	窪川	イチイ谷	33.21834	133.1319
2	いわもとどう	岩本坊	窪川	岩本坊寺中	33.20833	133.134
3	おおひら	大平	窪川		33.21027	133.1243
4	おおやぎれ	大切	窪川		33.21447	133.1223
5	おかざき	岡崎	窪川	岡崎ヤシキ	33.20888	133.1362
6	おかやしき	岡屋式	窪川	岡ヤシキ	33.21224	133.1385
7	おきやしき	沖屋式	窪川	ヲキヤシキ	33.21222	133.1365
8	かけのひら	カケノヒラ	窪川		33.21975	133.1365
9	かけのひら	景ノ平	窪川		33.21975	133.1365
10	きどのもと	キドン本	窪川	キトンモト	33.20999	133.1364
11	きょうでん	キョウデン	窪川	経田ノスソ	33.21379	133.1276
12	くまた	窪田	窪川	クボタ	33.20772	133.1296
13	くらたに	クラタニ	窪川		33.22101	133.1466
14	くらたに	倉谷	窪川		33.22101	133.1466
15	くろいわ	黒岩	窪川	クロイワ	33.2169	133.1303
16	くろのもと	クロノモト	窪川	クロ	33.20597	133.131
17	ここのさい	神ノ西	窪川	コウノサイコエ	33.2145	133.1223
18	さいのを	サイノヲ	窪川	サイノヲ	33.20622	133.1426
19	いけくしのにし	シケクシノ	窪川		33.2066	133.1335
20	いけくしのひがし	シケクシノ	窪川		33.20701	133.1367
21	ししば	シシバ	窪川	シシバノモト	33.21469	133.1353
22	しらつち	白土	窪川	シラツチ	33.21642	133.1254
23	しんかい	新開	窪川	シンカイ	33.20931	133.131
24	すけざわ	スケザワ	窪川		33.21203	133.1338
25	つかやぶ	ツカヤブ	窪川	ツカヤフ	33.21127	133.1396

図 11. 四万十町地名辞典の地名データベース

の民俗調査の成果をこのような形でDB化できるような歴史情報の収集を積み重ねていきたい。

4.3 地名資料のデータ化

地名は、山地や海、河川、田畑など生業に伴う土地利用の中で用いられた呼称で、住民が長く語り継いできた歴史資料でもある。地域に残る地名には、行政の小字図等に記載されたもののほかに、住民しか知らない通称地名・屋号・小地名が数多く存在する。しかし、これら小地名は戦後の生業の変化により使用されなくなり、古老の記憶に残るのみで記録、伝承されることなく数多くが消失している。

忘れ去られ、消えゆく膨大な地名を記録するには、それらを集積するデータボックスが必要である。そ

さおか本村 地域資源地図

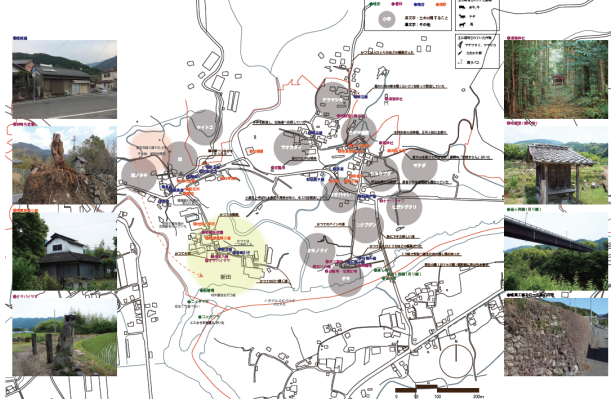


図 12. 佐岡本町の地域資源地図

種別	名称	エリア	特徴	年代	創設	指定	員	利用	現在	備考	位置情報	番号
店舗	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.64125, 133.72275	1
店舗	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.64023, 133.71645	2
店舗	明治屋	セガシ	花月から権利を譲り受ける							～昭和45年	33.63948, 133.72197	3
店舗	明治屋	セガシ								～昭和45年	33.63925, 133.72191	4
店舗	明治屋	セガシ								～昭和45年	33.63816, 133.72948	5
店舗	明治屋	セガシ	石段の購入							～昭和40年	33.63742, 133.72755	6
店舗	明治屋	セガシ	石段の購入							～昭和40年	33.63742, 133.72755	7
店舗	明治屋	セガシ	まきわり							～昭和40年	33.63945, 133.71867	8
店舗	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63925, 133.71865	9
店舗	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63925, 133.72197	10
店舗	明治屋	セガシ	番号 2月1							～昭和40年	33.63816, 133.71771	11
店舗	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.71771	12
店舗	明治屋	セガシ	家賃用							～昭和40年	33.63816, 133.71599	13
店舗	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63765, 133.71821	14
店舗	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63765, 133.71821	15
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	1
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	2
施設	明治屋	セガシ	テラスがきいてた							～昭和40年	33.63816, 133.72200	3
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	4
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	5
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	6
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	7
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	8
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	9
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	10
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	11
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	12
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	13
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	14
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	15
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	16
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	17
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	18
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	19
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	20
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	21
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	22
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	23
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	24
施設	明治屋	セガシ								～昭和40年	33.63816, 133.72200	25

図 13. 佐岡本町村の地域資源データベース

のため四万十町の住民団体「奥四万十山の暮らし調査団」が立ち上げたのがホームページ「四万十町地名辞典」(<https://www.shimanto-chimei.com/>)が、地域DBとして重宝されている。四万十町の地名に関する文献や地誌、小字、『長宗我部地検帳』のデータなどをさまざま文献や行政情報から収集し、DBとして整理している。地検帳と小字の照合も行い、小字の図心（中心）位置データも記載し、GISとも連動したDBの構築を進めている（図11）。

筆者も関わる「四万十町地名辞典」では、集落で民俗の聞き取りや踏査を行い、地名データに『長宗我部地検帳』や地誌の記載、土地利用、伝説などの属性を付加して検索できるDBを作成している。地名とGISを連動させた先行研究¹²⁾も参考にし、地名という位置情報をもとに、さまざま土地に関する

情報が調べられる DB モデル構築を目指したい。

5. おわりに―地域資源 DB 構築に向けて

本研究では、さまざま歴史資料の DB のモデルを示し、その方向性や方法論を考えてきた。各分野のデータ収集や DB 化の方向性はこれで間違っていないが、地域や一般利用を考えると十分とは言えない。さらに、これらは各分野の歴史資料を集約した単一的なもので複合的な DB とはなっていない。また、専門性が高く、地域性も薄いものになっている。

そこで、GIS 研究会や佐岡プロジェクトでは、まずモデルとなる小地域（佐岡本村地区）で各分野のデータを収集して一つの地図に分かりやすく表示し、住民も理解できる「地域資源地図」（図 12）という出力形式で示すことを模索している。データは、「地域資源 DB」（図 13）という形で、地図と連動し、地図上の地名のより詳細な情報が調べられるような形を模式的に示した。

研究利用型 DB を地域利用型にいかに昇華させるかも同時に議論すべきテーマである。先に示した歴史資料の保存・継承、オープンデータ化促進など DB 化の目的を達成するためには、歴史への住民や地域、行政の理解や資料保存活動への参加が欠かせない。そのためには、地域資源地図、地域資源 DB のような形の、研究利用だけでなく住民が地域活動に活用できる DB 構築も進めなければならない。

文献

- 1) 安藤文夫, “統合検索のための共通メタデータと歴博データベースのデータ項目のマッピング”, 国立歴史民俗博物館研究報告, 201 集, pp. 1–24, 2016.
- 2) 奥村弘, “大規模自然災害と地域歴史遺産保全”, 歴史評論, 666 号, pp. 2–22, 2005.
- 3) 楠瀬慶太, “地域づくりにおける歴史民俗分野の重要性―高知県における実践事例から”, 日本民俗学会第 68 回年会報告, 2016.
- 4) 高山正也, “公文書館等におけるデジタル・アーカイブズの現状と課題”, アーカイブズ, 28 号, pp. 1–4, 2007.
- 5) HGIS 研究会編, “歴史 GIS の地平”, 勉誠出版, 2012.
- 6) 金田明大, 津村宏臣, 新納泉, “考古学のための GIS 入門”, 古今書院, 2001.
- 7) 照井武彦, “人文・芸術系のデータベース”, 情報処理, Vol. 38, No. 5, pp. 383–387, 1997.
- 8) “記録資料保存継承を県内歴史研究者らシンポ”, 高知新聞 2014 年 9 月 23 日朝刊.
- 9) 村井亮介, 藤原匠, 高木方隆, 菊池豊, “フィールド研究を支援するフィールドデータベースのテストベッド製作について”, 高知工科大学紀要, 15 巻, 2018.
- 10) 池内克徳, 藤原駿, 渡辺菊真, 楠瀬慶太, “佐岡地区本村における歴史景観の調査”, 高知工科大学紀要, 15 巻, 2018.
- 11) 楠瀬慶太, “高知戦争資料保存ネットワークの設立について”, 地方史研究, 383 号, 2016.
- 12) 碓崎薫, 碓崎賢一, 服部英雄, “歴史的通称地名調査における WebGIS の活用”, 人文科学とコンピュータ, Vol. 52, No. 4, pp. 25–32, 2001.

An Attempt on Creating Historical Records Database in Kochi

Keita Kusunose^{1*} Syun Fujiwara² Katsunori Ikeuchi²

(Received: May 9th, 2018)

¹ Visiting Researcher, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

² Infrastructure Systems Engineering Course, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

* E-mail: kusukei31@yahoo.co.jp

Abstract: The purpose of this paper is to propound the necessity for creating historical records database in Kochi. The Geographic Information Science study group of history and environment in Kochi discussed the cooperation between history researchers of each fields. As a result it is necessary for creating historical records database available for citizens.